



<http://www.kinki-sha.org/>

近畿学校保健学会通信

No.154

2019年10月20日発行
近畿学校保健学会事務局
〒570-8555 大阪府守口市藤田町6-21-57
大阪国際大学 後和研究室
TEL : 06-6902-0791 FAX : 06-6902-8894
Mail : kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振込口座 00940-5-181826

目 次

第66回近畿学校保健学会（2019年度年次学会）報告

1. 第66回近畿学校保健学会を終えて	 2
2. 一般講演座長報告	 3
3. 教育講演報告	 7
4. シンポジウム報告	 8
5. 2019年度近畿学校保健学会奨励賞	 9
6. 学会印象記	 9
2019年度近畿学校保健学会奨励賞抄録	 12
2019年度近畿学校保健学会評議員会・総会 報告	 14
2019年度第1回近畿学校保健学会幹事会議事録	 16
新幹事長就任の挨拶	 17
幹事長退任の挨拶	 18
2019～2021年度幹事及び評議員名簿	 19
2019～2021年度監事名簿	 20
編集後記	 20

会費納入のお願い

本学会は会員の皆様の年会費を主な財源として運営しております。

2019年度の会費（3,000円）をまだ納めておられない方は、早急にお振込み下さいますようお願い申し上げます。

また、会員の皆様には、周囲の方々に本学会への入会をお勧め下さいますようお願い申し上げます。なお、入会案内パンフレットおよび入会申し込み用紙は、ホームページからダウンロード出来ますので、よろしくお願い申し上げます。

第 66 回近畿学校保健学会（2019 年度年次学会）報告

1. 第 66 回近畿学校保健学会を終えて

学会長 大平 曜子
(兵庫大学 健康科学部)

第 66 回近畿学校保健学会は、令和元年 7 月 6 日に兵庫大学において開催いたしました。兵庫県の東播磨地域に位置し、近畿の各地からご参加いただくには決して好位置とは言えない会場ではございましたが、会員の皆様をはじめ、企画運営委員の皆様、並びにスタッフの皆様の多大なご協力により、無事に終えることができました。心より感謝申し上げます。

本学会は、「チーム学校における学校保健の連携と協働」をテーマに、教育講演は、関西国際大学教育学部教授の中尾繁樹先生をお招きして「みんなの特別支援教育 ～からだづくり ころほぐし～」についてのご講演をいただきました。障がいのある無しに関わらず、一人ひとりの子どもたちの実態をしっかりと把握することが教育の基本であること、子どもたちの学び方はそれぞれ違うため、教育の方法も学びのプロセスも異なるということを実感し、考える機会となりました。続くシンポジウムでは、学校薬剤師、学校長、中学校保健体育教諭、養護教諭の 4 名のシンポジストにそれぞれの立場からご発表いただき、学会テーマを「一保健教育で伝えること」に絞り、皆で考える機会を設けました。4 名の実践に基づく問題提起は、それぞれにご参加いただいた方々の関心を集めました。テーマに沿った集約が難しく、各人が感じ取ったままを持ち帰っていただく形になったことは申し訳なく思います。シンポジストの発表からは、いのちを守る活動として保健教育、人との関係性の中で育まれる健康意識、保健教育によって獲得する主体的な保健行動など、保健教育が果たす役割を聞き取ることができました。

一般演題では、24 題を 3 つの会場に分かれてご発表いただき、8 人の先生方に座長を務めていただきました。A 会場は〈安全・配慮〉〈薬物・摂食障害〉〈健康教育〉、B 会場は〈健康管理〉〈大学生・健康教育〉〈健康意識〉、C 会場は、〈発達・支援〉〈運動〉に関する研究が発表され、各会場とも、活発な質疑応答が行われました。

昼には、兵庫大学健康科学部の学部長 朽木勤教授による「子どもの座位行動を身体活動に置き換える効果を考える」と題したミニ勉強会を開催しました。子どものみならず、現代社会の誰もが抱える健康リスクについてわかりやすくお話ししていただき、勉強になったとのお声を頂戴しました。

学会開催を機に新たな繋がりもできました。多くの方々のご支援、ご協力のありがたさを肌で感じることもできました。学問的価値の享受・共有はもちろんのこと、人的交流の意義の大きさを感じています。このような機会を頂けたことに改めて感謝申し上げます。

最後になりましたが、本学会開催にあたり、ご後援くださいました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2. 一般演題座長報告

第A会場

＜安全・配慮＞

座長 大川尚子（京都女子大学）

A-1 学校におけるヒヤリ・ハット発生時の教職員間のコミュニケーションの実態（細川愛実 他）

学校でのヒヤリ・ハットに関するコミュニケーションの実態を明らかにすることを目的に、公立小・中学校の教員を対象に質問紙調査を実施されその結果を報告された。ヒヤリ・ハットを伝える相手については、管理職や同学年教師間ではヒヤリ・ハットのコミュニケーションが活発に交わされていたが、ヒヤリ・ハットの伝達において、報告・連絡・相談の状況や阻害要因が明らかとなった。今後、この研究成果を生かして、阻害要因の改善のために、ヒヤリ・ハット伝達のシステム化の構築を検討されることを期待する。

A-2 養護教諭のニーズから頭部外傷研修の実践活用を目指して（中島敦子）

頭部外傷事故発生時の対応についての研修の効果について、研修会に参加した養護教諭を対象に質問紙調査を実施されその結果を報告された。「頭部打撲時の観察事項や確認事項」については研修参加者全員が「大変役に立つ」と回答した。経験年数によって、「セカンドインパクトシンドローム」と「呼吸測定の種類や正常呼吸数」については差が見られた。呼吸については、養護教諭にとって日常のOJTで自然に修得するには限界があり、特に経験の浅い養護教諭に対しては十分に配慮した指導が必要であるとの報告があった。この研究成果を生かして、今後も研修に取り組んでいただきたい。

A-3 養護教諭の救急処置研修への参加と処置に関する判断・対応との関連性（神崎園子 他）

養護教諭の研修参加と救急処置の判断・対応の自信との関連について明らかにし、その不安軽減と技術向上につなげる方策を探ることを目的に、県立学校の養護教諭に質問紙調査を実施されその結果を報告された。対応の自信と関連

したのは経験年数で、多くの項目で経験年数が長いほど有意に自信が高かった。看護師免許の有無で自信の高い項目に差がみられた。研修参加と関連する自信の項目は少なく、勤務経験を通じた対応の積み重ねが自信につながっていると報告された。今後さらに、研修の内容や方法の詳細を検討されることを期待する。

＜薬物・摂食障害＞

座長 鬼頭英明（法政大学）

A-4 薬物乱用防止啓発活動に関するリーダー育成効果の検討（毛利晴美 他）

本発表は、学園祭で学生による薬物乱用防止啓発活動としてミニ講義（30分間）を実施し、受講者によるアンケートから啓発活動をした学生のリーダー的能力及びリーダー育成効果について検討したものである。ミニ講義の感想には多くの受講者から非常に良かったとする回答が得られたとのことであるが、リーダー育成に際しては、講義内容の妥当性、正しい指導内容、参加者の人数やバイアスなどに留意する必要があると感じられた。また、予防教育の成果があったとするには、講義内容からは判断できないと考えられるので、さらに詳細な内容の検討が望まれる。

A-5 学校と医療のよりよい連携のために一保健室で使える摂食障害対応指針の紹介と研修会の評価－（唐木美喜子 他）

「エキスパートコンセンサスによる摂食障害に関する学校と医療のより良い連携のための対応指針」の作成に養護教諭が関わり、全国初の摂食障害ゲートキーパー研修会を開催することができたとのことであり、対応指針の内容が紹介され、研修会の評価についても報告された。A市とB市において研修会前後で質問紙調査を実施しており、B市は研修前から摂食障害について知識のある者が多く、研修後も知識がある者が増えたとしている。養護教諭は看護師免許を有するものとそうでない者がいること、関心度はそうした背景にも関係があるのではないかなども含めて研修会の効果評価をする必要があると感じられた。

A-6 学校と医療のよりよい連携のために—摂食障害における早期対応と予防での養護教諭の関わりについての調査より—（大波由美恵 他）

本発表は、前掲の「対応指針」の活用に関する2回目のゲートキーパー研修会において実施した「小児の摂食障害における早期対応と予防での養護教諭の関わりについて」の調査結果を報告したものである。養護教諭による児童生徒への早期対応経験は高いこと、早期対応については校内体制の充実が関係しており、情報共有し役割分担をして対応を継続することが重要であると述べられている点は評価できる。また、一次予防がほとんど実践されていないことの問題点が挙げられていた。成長曲線の重要性和小学校から中学校へつなぐことの意義、チーム学校としての活性化等の意見が出された。

<健康教育>

座長 西岡伸紀（兵庫教育大学大学院）

A-7 小学校における人型ロボット（Pepper）を活用した保健学習に関する研究（谷川尚己 他）

Pepperを小学校の保健学習に活用し、感想文、質問紙調査により効果を調べた。指導内容は、「毎日の生活と健康」「育ちゆく体とわたし」「事故やけがの原因」「喫煙、飲酒、薬物乱用と健康」とした。授業では、指導者が発問や反応を事前入力したPepperに児童が働きかけたり、児童が発表内容を入力しPepperを通して発表したりした。その結果、児童の70%以上が肯定的な「感想」や「理解」を示し、多様な意見の発表、話し合い活動の充実、理解度の向上、楽しさ面白さ等が認められた。今後、Pepper活用の一層の具体化、効果の根拠の明確化などが期待される。

A-8 中学校保健授業の導入における教材開発—「健康な生活と病気の予防」に着目して—

（山本泰誠 他）

中学校保健学習において、導入における教材・教具の工夫が、学習意欲の喚起、展開・まとめの学習活動に充実につながるとの仮説のもと、導入を工夫した授業を行い、理解度の変化、授業への印象、感想文を調べた。工夫の例として、くし

やみによる飛沫拡散の距離の明示、薬の飲み合わせの実験、薬物様の紅茶を使った乱用への誘い等が紹介された。その結果、導入が印象に残ったり理解度の向上が確認されたりするなど、効果が認められた。今後、導入の工夫と理解の促進の関連性の分析、薬の副作用の理解促進等展開の工夫も期待される。

A-9 大学生の匂いへの意識と社会性との関連（井上文夫 他）

教員養成大学学生を対象に、匂いに関する意識と社会性との関連を調べた。匂いに敏感とするのは男子76%、女子86%で、汗臭、口臭等を気にしており、男子57%、女子65%が体臭対策を行っていた。また匂いに敏感な者は、同対策をより実施していた。意識と社会的スキル全体との関連性は不明確であったが、両親に不快な匂いがある場合に知らせることと社会性の下位尺度が有意に関連した。今後、シックハウス等への反応を含む感性の個人差に対する理解、匂いへの意識と清掃や清潔との関連付けなどが構想されており、発展が期待される。

第B会場

<健康管理>

座長 辻井啓之（奈良教育大学）

B-1 夕食時刻と生活習慣・健康状態・意識との関連（嶋津裕子）

本研究では、2009年12月に食育推進事業として実施された、小学校5年生、中学校2年生を対象に質問紙法で行われた既存のデータの2次分析を行っている。遅い時刻の夕食摂取や夕食時刻が不規則な者は、朝食欠食の傾向にあり、また、自分自身の食生活や生活習慣への評価点が低い傾向にあった。当時のデータから、生活リズムを整えることの重要性が再確認されている。昨今の環境変化には、この10年間で、特にメディアの面などにおいて著しいものがあり、現在同様の調査が行われればいかなる結果が出るかは非常に興味深い。そのような試みに期待したい。

B-2 運動器検診に伴う養護教諭による事前指導と事後指導に関する現状と課題—高等学校における養護教諭の指導内容に着目して—

(八木利津子)

2016年度より「運動器検診」が義務化され、現在それなりに定着した感があるが、本研究では高等学校において、養護教諭10名を、若年・中堅・高年の3群に区分して事前・事中・事後指導についてヒアリング調査を行い、対応の違いや課題を検証している。経験年数に応じて、それなりに充実していく方向性がみられたが、概ね運動器検診の意義は理解され浸透していると考えられる。発表者は学校医の意見、校種による着目点の違いなどをさらなる研究課題としている上、高校では運動不足と運動過多の二極化にも注目し、幼少時からの指導の必要性にも言及している。運動器検診の充実に寄与するものと考ええる。

B-3 ストレス要因が教員のメンタルヘルスに及ぼす影響 (福山沙羅 他)

発表取りやめ

<大学生・健康教育>

座長 春木 敏 (甲南女子大学)

B-4 大学生における生活習慣改善と意思決定スキルとの関連性 (衛藤佑喜 他)

不規則な生活習慣を送る大学生は、欠食・過食等に伴う痩せ・肥満に陥る傾向が散見される中、食事・運動・睡眠行動と意思決定スキル(DMS)の関連性につき検討。7大学の学生(男性327人/女性216人)を対象に調査実施。保健行動とDMS得点の有意性から、熟慮型DMSが保健行動に寄与する可能性を示唆。生活習慣改善に向け、簡易な食習慣改善をベースに他の生活習慣改善へと、実行性を高める方法を用いるなど、大学生を対象とする健康教育の方法論として更に、発展されることが期待される。

B-5 看護学生を対象に LTD 話し合い学習法を科目「学校保健論」に3年間試行した教育効果 (古角好美)

LTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法を用い、「学校保健論」にて3年実施、受講看護学科生98名を対象に教育成果検討。予習・ミーティング(ディスカッション)を通し、各年度3回質問紙調査(ディスカッションスキル尺度・協同効用・コミュニケーションスキル・自尊感情)にて、学習成果が評価されている。選択教科であり各年度の受講者数は43/117, 44/88, 34/116名で、受講生の特性による成果とも読み取れる。今後に向け、研鑽されたい。

B-6 大学新入生の生活習慣と学生生活への適応感について (高山昌子 他)

新入生(男子54名・女子28名 計82名)につき、生活習慣・学生生活適応・ライフスキルについて、質問紙調査実施。部活動所属未定増、アルバイト5時間(44.9%)4回/週(30.6%)なども散見されている。就寝時刻:24~0時30分(34.1%)1時~1時30分(23.2%)起床時刻8時(25.6%)など不規則な生活管理に加え、部活動も低下傾向にあるなど、青年期における喫緊の課題といえる。解決に向け、ライフスキルを如何に適用・活用するとよいかにつき、検討・提示されたい。

<健康意識>

座長 吉岡隆之 (奈良学園大学)

B-7 児童生徒の学校健康診断結果の理解と活用—小・中・高生に対する予備的質問紙調査の結果より— (大西 瞳 他)

予備調査として小5・中2・高2生を対象に質問紙調査が行われた。選択式質問項目の分析から、特に中2は健康診断への負担を感じやすく、結果からのリスクや対策の必要性の認識、予防措置の動機をやや感じにくいことが示唆され、KJ法による自由記述の分析から、負担として「恥ずかしい・服を着替える」、健診結果の活用として「家族に見せる・家族に相談する」等の成人とは異なる回答がみられたとのことであった。今回は対象が限られ結果は明快ではなかったが、研究計画や分析方法がきっちりしており本調査では多大な成果が期待される。

B-8 学校保健における身体計測の意義について (白石龍生)

学校保健における身体計測の意義について、大学1年生を対象とした質問紙調査に基づき論じられた研究である。調査結果から、約8割が身体計測値を返却されており、約半数が成長曲線の提示を受けているもののその全員が説明を受けていないことが明らかとなった。学校現場で通常用いられている成長曲線そのものの妥当性にもふれ、発育の個人差を考慮した縦断的データを用いた成熟度別の発育基準曲線の活用促進が唱えられた。成熟度別発育基準曲線の活用により、児童・生徒が自身の発育に興味を抱き意義を見いだすことの可能性に期待したい。

B-9 葛藤場面における傍観者の行動決定要因についての検討 (五十棲 計 他)

いじめ場面の被援助者(被害者・加害者)が共に統制可能な原因を有する葛藤場面が設定され、傍観者の行動決定要因について、15～46歳を対象にテキストマイニングの手法で検討された。被害者への協力か非協力について、自身と他者の行動選択の分析から「自身も他者も非協力」の選択が最多で、理由(自由記載)の最頻出語は「無視」次いで「自分」で、共に否定的文脈で多出し「無視行動の忌避」という利己的意図による行動決定が多くなされる可能性が示された。学校現場の重要テーマであり、今後の詳細でより現実的な検討に期待したい。

第C会場

<発達・支援>

座長 中村晴信(神戸大学大学院)

C-1 低出生体重児の就園・就学に対する保護者の意識について (小島光華)

本研究は低出生体重児の就園に対する支援のあり方について検討したものであり、低出生体重児を持つ保護者を対象として、低出生体重児の体重や在胎週数、就園を考え始めた年齢や就園希望施設等を調査した。就園の時期は仕事との関係で判断する場合が多かったが、低出生体重児であることから、体格や発達の遅れなど、次

の特性を考えた就園環境を望んでいた。本邦の低出生体重児の割合は10%程度と一定割合を占めることから、低出生体重児とその保護者を対象とした本研究の意義は大きく、本研究のさらなる発展を期待したい。

C-2 吃音者(児)の吃音に対する受け止め方について～幼児期から青年期までの発達段階別に周囲との関わりを振り返って～ (頃安史基 他)

発達段階における吃音者の吃音に対する受容と周囲との関わりについて事例を通して検討した研究である。本事例では、幼児後期から青春にかけて、吃音に気づくことによる劣等感や、学童期での会話に対する消極的程度、思春期での吃音に対する悩みの加速、青年期における吃音に対する受容等が報告された。また、各発達段階に応じた支援も必要であることも報告された。吃音は発達障害者支援法にも含まれたことから、今後ますます事例の集積が必要となる。また、吃音者による受容に加えて周囲や社会の支援も含めた研究の展開を期待したい。

C-3 出生前診断に対する意識と今後の課題

(藤原 寛 他)

出生前診断に対する意識と課題について母親と学生を対象に調査した研究である。出生前診断に対する考えや、出生前診断の受診や中絶の有無についての結果が紹介された。学生と母親の間では結果に差がみられたが、例え同じ結果でもその判断のプロセスについては各個人の事情が関係していることも示された。出生前診断については個々の事情や考え方やあるいは障害者の支援体制にも依存する部分があるため、出生前診断に対する理解や支援を促進するためにも、本研究は重要な示唆をもたらした。

<運動>

座長 後和美朝(大阪国際大学)

C-4 幼児期の日常の運動遊びが運動能力に及ぼす影響について (竹端佑介 他)

幼少時期の身体活動の現状と運動能力との関係を検討した研究で、子ども達の日常の運動遊

びやスイミング等の運動に関わる習い事についての現状と、運動能力調査結果と運動（遊び）習慣との関連性が報告された。運動遊びや身体発動を伴った習い事を行っている幼児はいずれの運動能力も優れた結果であったが、バス等の登園方法も影響するのではないかな等の意見が出された。特に、運動遊びが少なく身体活動を伴った習い事を行っていない幼児であっても高い運動能力を有したケースがあり、個々の生活習慣や兄弟の有無、保護者の意識等が関係していることも推察され、直接的な要因以外についても検討が必要と思われる。

C-5 幼児における日常の身体活動量と家庭及び保育施設における生活環境との関係

（米野吉則 他）

身体活動や座位行動を測定できる加速度計を用いて幼児の身体活動や座位行動を測定され、異なる保育環境で比較検討された研究である。園庭が広いこども園では中高強度の身体活動時間が多くなっただけでなく、平日においてもこのような保育環境で過ごす幼児は休日においても座位行動が少なく、中高強度の活動が多い傾向にあることも報告された。園庭が広い等の運動が行える環境で日常的に運動を行っていた場合、潜在的な運動習慣の獲得につながっていることも指摘されているが、園庭が小さい等の運動習慣の獲得が難しい環境にある子ども園においても身体活動量を効果的に増やし、さらに運動習慣が獲得できるような方策についての検討を期待したい。

C-6 思春期前期における身体活動・座位行動が抑うつ、首尾一貫感覚に及ぼす影響（川勝佐希 他）

思春期前期にある小学校高学年と中学生を対象に身体活動や座位行動と抑うつや首尾一貫感覚との関連性を検討された報告である。全国の児童生徒を対象にした比較的大規模な調査であり、地域性なども比較検討に加えて、調査期間も2年間にわたって行われており、身体活動時間や活動強度、活動内容の季節性等についても結果に影響を与えることが考えられる。中学生では

活動内容による影響があることも指摘されており、特に抑うつや首尾一貫感覚のような精神的な指標に関しては調査時の直近の出来事、例えばテストや大会等の前後に調査が実施されていた場合、その影響も考えられ、種々の要因を排除した分析を期待したい。

3. 教育講演報告

「みんなの特別支援教育

～からだづくり こころほぐし～

講師：中尾繁樹（関西国際大学教育学部 教授）

2019年度から大学における「教育の基礎的理解に関する科目」に「特別支援教育論」が必修科目となりました。今回、関西国際大学教育学部教育福祉学科の中尾繁樹教授にお越しいただき、特別支援教育についてお話しいただきました。

まず、特別支援教育とは障がいの有無にかかわらず、すべての子どもたちのためにすべての教職員が関わる教育であるという理念を基にした授業づくりについて解説されました。特別支援教育の視点を導入する授業は、子どもたち一人一人のニーズを把握しながら集団指導に組み込んでいくので、学び方の違う40人に授業の中でどんな力をつけさせたいかのねらいが明確になり、子どもにとってはワクワクドキドキする授業になるとの説明がありました。その後、なぜ「からだづくり・こころほぐし」が大切かについて、姿勢・移動運動の発達や目と手の協調の発達、ものの理解と対人の発達、利き手や土踏まずの形成からわかりやすく説明されました。また、最近の子どもたちの体と心の変化に着目され、例えば、しゃがめない、きれる、力が抜けないなどには、乳幼児期から「多様な動き」が必要であると言及されました。学童期以降のどのステージでも有効な運動を紹介され、「学習に向かうことができる体」との関連について話されました。さらに、子どもの言動に対する課題の理解や担任やトレーナーに求められる資質についての具体的なお話として、特別支援教育の視点からプロ選手のコーチングとティーチングを通して選手の成績やモチベーションを上げることができた事例には説得力があり、聴講されている参加者

は、学校保健を進めるにあたって、特別支援教育の視点が不可欠だと考えられたことと思います。最後に、人間の発達過程にある感覚統合の大切さを解説され、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を育むためには、教職員全員で進めていく特別支援教育の考え方、すなわち、学校においてはその基盤となる「からだづくり・こころほぐし」の広がりが期待されます。

4. シンポジウム報告

「チーム学校における学校保健の連携と協働

ー保健教育で伝えることー」

コーディネーター：大平曜子（兵庫大学）

(1) 『「チーム学校」学校薬剤師の立場から』

青木麻実子（播磨薬剤師会）

学校薬剤師の学校保健とのかかわりは、学校環境衛生検査の実施だけでなく、児童生徒に薬の正しい使い方や危険な薬物の話をしたり、ノロウイルスによる嘔吐の処理の仕方を先生に指導したりと多岐にわたります。ここでは、現在、地域中学校と一体になって取り組んでいる薬物教育の実践事例から、養護教諭や担任との連携の在り方や学校薬剤師が直接行った講義やロールプレイなどについて報告されました。

一見遠い存在のように感じる薬剤師は、何

でも相談できる身近な存在であること、そして保健指導においては、先生と連携・協働して進めていける頼りになる協力者であることがわかりました。

(2) 「学校の責任者の立場から」

岩田研二（加古川市立若宮小学校長）

子どもたちにとって学校が安全・安心なところにするにはどうすれば良いのでしょうか。

子どもたちをしっかりと観察し、情報を教職員で共有し、計画を立てると、子どもたちはこの先何が起ころか「見通し」がつき、そのことが安心につながるそうです。観察と情報の共有に基づいて見立てをすると、その個性も受け入れやすくなると説明されました。子どもたちとの信頼関係は、安易な授業方法の変更で得られるものではなく、気配りにあり、担任だけでなく多くの目で子どもたちの発達を見守ることが大切だといえます。保健教育は丁寧な観察と情報の共有など連携・協働を軸にして展開されることがわかりました。

多様化する子どもたちに向き合い、子どもたちの安全と安心を確保するためには、組織的に柔軟に対応できる学校である必要があることが報告されました。



シンポジウムの風景

**(3)「学校環境衛生活動を生かした保健教育～
温熱条件や明るさの至適範囲：授業実践事前・事後調査の結果～」**

松比良菜々（京都市立久世中学校教諭）

学習指導要領の保健分野における「生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる」という目標と学校環境衛生基準の改正を背景に、保健分野「健康と環境」の授業実践を報告していただきました。一般に学習意欲が低くなるといわれる単元ですが、導入でのブレインストーミングや実感を持って理解できる授業展開により、生徒たちの興味関心を引き出すことに成功し、健康への意識を高めることができた授業事例でした。生徒たちは新たな発見と気づきがあれば意欲的に授業に取り組めることをお示しいただいたと思います。

(4)「保健教育における学校内外との連携」

八木泰子（神戸市立高丸小学校養護教諭）

子どもたちの自身が自己の体に関心を持ち、将来にわたり健康な生活を送るための実践力をつけることを願って進められている保健教育ですが、生活実態調査や健康意識調査の結果から気持ちや生活をコントロールし、調整する力が必要だと分かりました。そこで、発達段階に応じた系統だった教育活動ができるように学校保健計画を計画・立案し、他教科との関連を位置付け、学校内外との連携を図った保健教育を実践されました。低学年には日本シューズ協議会の方に足型や履き方などをご指導いただき、姿勢改善に取り組まれました。中学年にはスクールカウンセラーと養護教諭でアンガー・マネジメントの授業をし、高学年には地域の方々からお教えいただく機会を設けるなど、内外の方々の協力・連携を伴った保健教育の実践事例をご報告いただきました。

将来の健康生活の糧となるには、意欲の継続が必要であり、そのためには他者から認められる機会と心に残る授業体験が重要ではないかと課題を提示されています。保健教育が目指すところの、健康生活のための行動変容の難しさをいっそう感じました。

5. 2019 年度近畿学校保健学会奨励賞

選考委員会による審査の結果、次の者が 2019 年度近畿学校保健学会奨励賞として採択された。

受賞者：衛藤佑喜（兵庫教育大学大学院）

**演題：大学生における生活習慣改善と意思決定
スキルとの関連性**
(抄録は P.12 に掲載)

受賞者：大西 瞳（兵庫教育大学大学院）

**演題：児童生徒の学校健康診断結果の理解と活用
一小・中・高生に対する予備的質問紙調査の結果よりー**
(抄録は P.13 に掲載)



学会奨励賞を受賞したお二人

6. 学会印象記

衛藤佑喜（兵庫教育大学大学院）

兵庫大学で第66回近畿学校保健学会が開催されました。学会発表では、先生方から研究方法や分析方法の充実について貴重なご指摘や温かい励ましのお言葉をいただき、大変刺激的一天となりました。また、一人一人のお言葉に近畿の強い絆を感じました。その中で、奨励賞に選出していただきまして、心から感謝申し上げます。大変嬉しく思っております。奨励賞受賞を支えに今後も研究に励んでいきたいと思ひます。

一般演題については、様々の領域をご専門とされる先生方との間の質疑応答、意見交換から、研究のヒントになる知見を得て、新鮮で有意義な機会になりました。教育講演では「みんなの特別支援教育 からだづくり・こころほぐし」というテーマで、中尾繁樹先生による専門的で興味深く大変分かりやすいお話を拝聴することができました。また、シンポジウムでは学校薬剤師、学校長、教諭、養護教諭の異なる立場からお話して、学校現場の経験がない私にとって、なかなか聞くことのできない貴重なものでした。多様化する子どもたちの課題に対して、教員間での細かな観察や情報共有により、多様な視点から組織的に支援していくことが大切であると感じました。なお、第66回大会では、運営スタッフとしても携わる機会をいただき、学会運営についても興味深く勉強させていただきました。

最後になりましたが、このような素晴らしい大会を開催していただいた第66回近畿学校保健学会会長の太平曜子先生、事務局長の細川愛美先生、運営スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

大西 瞳(兵庫教育大学大学院)

この度は奨励賞に選出していただき誠にありがとうございました。研究について評価していただき大変光栄に思います。

この度の学会では、学会テーマである「チーム学校における学校保健の連携と協働」に通じる学びを得ることができました。発表や講演、シンポジウムから、学校保健が教員だけでなく医師や栄養士等の多様な立場の方々に支えられていることを改めて感じました。また、会場では参加者の皆様が発言に意見交流や情報交換をされている様子を多く拝見し、皆様の心の距離の近さを感じました。私にも発表時だけでなく発表後にも声をかけてくださり、研究結果の考察に関わる貴重なご意見を頂戴するとともに、研究の進め方や分析方法に関する私の質問にも時間を割いて温かく答えてくださいました。

以上のことから、学校保健の推進において、多様な立場から構成される「チーム」で取り組むこ

との重要性と、互いの意見を気兼ねなく交流することができる雰囲気の重要性を実感することができました。この学びを養護教諭としての今後の学校保健活動に活かすとともに、皆様から頂戴したご意見やご指摘を活かし、よりよい研究ができるよう精進いたします。

最後になりましたが、発表の機会を与えてくださった第66回近畿学校保健学会長太平曜子先生、事務局長細川愛美先生をはじめ、学会開催にご尽力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

小島光華(兵庫大学)

第66回近畿学校保健学会が兵庫大学で開催されました。当日のお天気が心配されましたが、運営スタッフの祈りが天に通じ、緑豊かな本学に皆様方を無事、お迎えすることができました。

本学会では「チーム学校における学校保健の連携と協働」というテーマを掲げ、午前の部で学部生・大学院生や教員、養護教諭、看護師など、学校保健に携わる教育・医療の様々な領域から24件の演題を発表いただきました。

中尾繁樹先生の教育講演では、最近の子ども達のからだやこころの特徴についての具体例と原因についてご説明くださり、みんなの特別支援教育を実施するためには、子どもの実態を把握するとともに、からだところをほぐすことの必要性和実践について学ばせていただきました。願わくは、ご用意いただいたスライドを余すことなく拝見したかったです。

シンポジウムでは学校に携わる4人の先生方から、学校保健についてのそれぞれの立場からお話しいただき、子ども達の課題解決のために「チーム学校」として多職種連携・共同の重要性を認識しました。

学会運営にはたくさんの学生がボランティアとしてご協力くださいました。講演会では熱心にメモを取りながら聴講する姿を頼もしく感じると共に、学会に参加し、実際に目で見て肌で感じたことが、この先子ども達と接する時の糧になると信じております。

竹端佑介（大阪国際大学）

緑豊かな自然に囲まれた兵庫大学で第66回近畿学校保健学会が開催されました。普段、自然に触れる機会がほとんどない私は、海や自然の数々の景色を車窓から眺め、興奮しながら、学会会場を目指しました。

さて、メインの学会ですが、午前中は3つの会場で24題の一般研究発表が行われました。今年度は例年に比べて演題数が少なく残念でしたが、どの会場も活発にやり取りされておりました。心理学を専門とする私にとっては、家庭や保育環境による子どもの身体や健康状態への影響についての発表をいくつか聴くことができたことは非常に有難く、心身両面における基礎的研究をもとにしながら学校教育にどう寄与できるか考えさせられました。

ミニ勉強会では、兵庫大学の朽木先生が子どもの座位行動について豊富なエビデンスに基づいてお話され、普段あまり座ることについて考えたことのない私にとっては大変勉強になりました。また、教育講演では関西国際大学の中尾先生がユーモアたっぷりにこれまでの学校現場だけでなく、様々なアスリートや非行青少年少女達の関わりなど実に多彩なご経験をもとにご講演されました。学校現場で子どもたちを支援し

ていくには、障がいを見つけることだけに徹するのではなく、どんな子どもにも「視点を沢山持つ」ことが大事であるという先生のお話はとても印象的でした。そのためにも当たり前のことではありますが、支援する側の私たち自身がところからだについての様々な知識を持つことが必要であることも改めて実感しました。さらに、シンポジウムでは『チーム学校における学校保健の連携と協働』について現場の先生のお話を拝聴することができました。学校現場での子どもたちの心身の成長に私たち大人がどのような役割を果たせるか今一度立ち止まって考える必要があり、今年度の学会はまさにその機会を与えて下さったのではないかと思います。

今回の学会も大変有意義なものであり、本学会が果たすべき役割はますます大きいものであると感じました。次年度大阪で開かれる学会も期待しております。

今年は幼児、児童が巻き込まれた痛ましい事件、事故が多数起きました。事件、事故に巻き込まれた子どもたちの心身の具体的なケアについて、本学会も考えていく必要があると思います。

最後に、亡くなれた子どもたちのご冥福を心からお祈り申し上げます。



教育講演の風景

2019 年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

大学生における生活習慣改善と意思決定スキルとの関連性

○衛藤佑喜¹⁾, 岡本希¹⁾, 西岡伸紀¹⁾

1) 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

キーワード 大学生 生活習慣改善 意思決定スキル

【目的】

大学生は、生活習慣の乱れが朝食欠食習慣に関わる報告¹⁾や肥満と痩せの割合の増加による体力の低下²⁾、慢性的な睡眠不足状態・睡眠覚醒リズムの問題による睡眠相の後退が指摘されている。生活習慣改善が必要であるが、それには適切な意思決定が不可欠であると考え。本研究の目的は、食事、運動、睡眠の各生活習慣改善と意思決定スキルとの関連性を明らかにすることである。

【方法】

1) 調査対象：2018 年 10 月～11 月に、7 大学の大学生 580 人を対象とし、無記名自記式質問紙調査を行った。欠損回答を除いた 543 人（男性：327 人、女性：216 人、年齢：19.6±1.1 歳）を分析対象とした（有効回答率 93.6%）。

2) 調査内容：基本属性、意思決定スキル尺度得点（以下、DMS）（西岡ら、2017）、朝食摂取の有無（厚生労働省、2010）、食品摂取の多様性評価票（熊谷ら、2003）、国際標準化身体活動質問票（以下、IPAQ-SV）（村瀬ら、2002）ピッツバーグ睡眠質問票日本語版（以下、PSQI-J）（土井ら、1998）を用いた。生活習慣改善については、食習慣と運動習慣と睡眠習慣の入学後の改善経験の有無を選択肢形式で尋ねた。

3) 分析方法：生活習慣と改善経験との関連は χ^2 検定、改善経験と DMS 尺度得点の関連性については男女別で t 検定を行った。食習慣・運動習慣・睡眠習慣の改善経験の有無及び項目間の相互関連については四分点相関係数を算出した。

【結果】

食品摂取頻度と改善経験との関連は、男性で魚介類、卵、大豆・大豆製品及び果物類が食習慣改善群の方が有意に摂取頻度が高かった（魚介類：改善群 39.6% vs 非改善群 28.3%，卵類：改 80.2% vs 非改 65.0%，大豆・大豆製品：改 54.5% vs 非改 41.0%，果物類：改 45.5% vs 非改 29.3%）。IPAQ-SV と PSQI-J については、有意差がみられなかった。

改善経験と DMS 尺度合計得点との関連は、男性では食習慣において、女性では睡眠習慣において DMS 尺度合計得点が改善群の方が有意に高得点であった（男性：改 49.7 点 vs 非改 46.7 点、女性：改 48.2 点

vs 非改 45.9 点）。改善経験と DMS 下位尺度得点との関連は、男性では食習慣において、「情報・選択肢」（改 19.2 点 vs 非改 18.2 点）、「結果の予測」（改 14.6 点 vs 非改 13.6 点）、運動習慣において、「結果の予測」（改 14.8 点 vs 非改 13.6 点）が、女性では睡眠習慣、運動習慣において「結果の予測」が改善群の方が有意に高得点であった（睡眠習慣：改 14.4 点 vs 非改 13.2 点、運動習慣：改 14.6 点 vs 非改 13.1 点）。また、男女とも各々の改善経験間で有意な正の相関があり、食事・運動・睡眠の改善経験は相互に関連していることが示唆された。男性では、食習慣と運動習慣（ $\phi=0.430$ ）において、女性では食習慣と睡眠習慣（ $\phi=0.377$ ）において改善の関連が強かった。改善経験の項目間では、「栄養バランスを考える」と「適度な睡眠時間」（ $\phi=0.345$ ）、「間食を控える」と「エスカレーターやエレベーターを控える」（ $\phi=0.325$ ）において改善の関連が強かった。

【考察】

単変量解析では、保健行動と DMS 尺度の合計得点、結果の予測との間に有意な関連がみられ、健康的な行動であるほど得点が高かったことから、「結果の予測」「情報・選択肢」の熟慮型の意思決定スキルが保健行動に貢献する可能性が示唆された。また、生活習慣の改善経験が相互に有意に関連していることから、生活習慣改善のためには、一つ取り組みやすい生活習慣を改善し、別の生活習慣の改善に取り組むことが方策の一つと考える。改善経験の項目間別において、食習慣の改善経験の項目と他の生活習慣改善の関連が強く、食習慣の改善割合が高いことから、大学生においては食習慣の改善をきっかけに改善習慣を拡大できる可能性がある。発表時には、多変量調整後の DMS 尺度得点と改善との関連を検証したロジスティック回帰分析の結果も示す予定である。

【引用・参考文献】

- 1) 長幡友実, 中出美代ら：住まい別にみた大学生の朝食欠食習慣に及ぼす要因. 栄養学雑誌 72(4):212-219, 2014
- 2) 下門洋文, 中田由夫ら：大学生における 26 年間の体型と体力の推移とその関連性. 体育学研究 58: 181-194, 2013

2019 年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

児童生徒の学校健康診断結果の理解と活用 一 小・中・高生に対する予備的質問紙調査の結果より

○大西瞳¹⁾，中村襟香¹⁾，林眞季¹⁾，岡本希¹⁾，西岡伸紀¹⁾

1) 兵庫教育大学大学院

キーワード 健診結果 理解 活用 学校

【目的】

健康診断(以下、健診)結果の理解や活用に関する健康教育は、高等学校卒業までに児童生徒の実態に応じた計画的に指導することが望まれる。本研究では健診の理解、結果の活用に関する実態を把握することを目的として、小・中・高生を対象に質問紙調査を行う。本報では予備的調査の結果を報告する。

【方法】

A 府内公立小学校の5年生26名(男子14名、女子12名)、同中学2年生31名(男子15名、女子16名)、同高校2年生41名(男子16名、女子25名)を対象に、2019年3月に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問項目は、性別、健診の結果及び目的の理解、健診による恩恵及び負担(各、恩恵、負担)(選択式)、及び恩恵、負担、健診結果の活用(自由記述式)とした。

全選択式質問項目間の相関を求め、相関がみられた項目を6項目(「健康状態の認識」「リスクと対策の必要性の認識」「予防措置の動機」「健診の目的の認識」「恩恵」「負担」)にまとめ、各合計得点を算出した。各合計得点の校種間差をKruskal-Wallis検定、性差をMann-WhitneyのU検定、各合計得点間の関連についてSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。自由記述式の回答結果についてはキーワード(以下、KW)を抽出し、複数の研究者の協力を得てKJ法を参考に分類した。KWの出現頻度の差の検定には χ^2 検定を用い、調整済み残差によって残差分析を行った。

【結果】

校種別の各合計得点は以下の表のとおりであった。表. 各合計得点の中央値(四分位数)及び校種間差

校種	小学生	中学生	高校生	校種間
n=98(100)*	26(27)	31(32)	41(42)	
健康状態の認識	7.0(6.0, 8.0)	8.0(6.0, 8.0)	8.0(6.0, 8.0)	n.s.
リスクと対策の必要性の認識	11.0(10.0, 11.0)	10.0(9.0, 11.0)	11.0(9.0, 11.0)	n.s.
予防措置の動機	18.0(17.0, 19.0)	17.0(15.0, 19.0)	19.0(17.5, 20.0)	*
健診の目的の認識	16.0(15.0, 17.0)	16.5(13.0, 19.0)	17.0(15.0, 19.0)	n.s.
恩恵	16.5(14.5, 18.5)	18.0(16.0, 19.0)	19.0(17.0, 20.0)	**
負担	7.0(5.0, 8.0)	9.0(8.0, 10.0)	9.0(7.0, 10.0)	**

Kruskal-Wallis検定 *p<0.05, **p<0.01 (25%値, 75%値)

※標本数()内は%

各合計得点間の相関を求めた結果、「恩恵」と「リスクと対策の必要性の認識」「予防措置の動機」との間に相関がみられ($r=.332, .393, p<.01, .01$), 「負担」と「予防措置の動機」との間に負の相関がみられた($r=-.235, p<.05$)。校種間では他に相関はみられなかった。男女別にみると、女子では「恩恵」と「健診の目的の認識」との間に相関がみられ($r=.346, p<.05$), 男子では「負担」と「リスクと対策の必要性の認識」との間に負の相関がみられた($r=-.317, p<.05$)。

項目間では、「リスクと対策の必要性の認識」と「予防措置の動機」との間に相関がみられたが($r=.451, p<.01$), 他の項目間に相関はみられなかった。校種別にみたところ、高校生では「健康状態の認識」と「リスクと対策の必要性の認識」との間に相関がみられた($r=.403, p<.05$)。男女別にみると、女子では「予防措置の動機」と「健診の目的の認識」との間に相関がみられた($r=.346, p<.05$)。

自由記述のKWの延べ件数は「恩恵」(123件), 「負担」(94件), 「健診結果の活用」(107件)であった。「恩恵」で多かったKWは、「悪くなる前につけられる」(28件), 「健康状態が分かる」(24件)等であった。KW出現頻度の校種間差は「健康であることが知れる」にのみ有意差がみられ、小学生の件数が多かった($\chi^2=7.813, df=2, p<.05$)。「負担」では「悪かったら心配になる」(22件), 「面倒」(11件)等があり、校種間で有意差はみられなかった。「健診結果の活用」では「家族に見せる」(28件), 「自分で見る」(26件)等が見られ、「今の状態を確認する」(男3件、女11件)については男女間で有意差がみられた($\chi^2=4.434, df=1, p<.05$)。

【考察】

健康状態の認識は校種が上がるにつれて概ね向上するが、中学生は健診に対して負担を感じやすく、健診結果からリスクや対策の必要性の認識、予防措置の動機を感じる事が小・高生と比べてやや弱いことが示唆された。また、健診による恩恵や負担は健診結果の理解に一部関連があることが示唆された。

自由記述の項目では、「負担」として「恥ずかしい」「服を着替える」, 「健診結果の活用」として「家族に見せる」「家族に相談する」等の成人を対象とした健診とは異なった回答がみられた。

2019 年度近畿学校保健学会

評議員会・総会 報告

日時：2019年7月6日（土曜日）12：40～13：30

場所：兵庫大学（5号館401講義室）

議題：

1. 平成30年度事業報告
2. 平成30年度決算報告及び会計監査報告
3. 2019年度予算案（事業計画）
4. 名誉会員の承認
5. 次期学会開催地及び会長
6. その他

1. 平成30年度事業報告

1) 会員数

271名（名誉会員15名を含む、平成31年3月31日現在）

2) 会議開催、学会通信など

・幹事会

平成30年5月26日 第1回近畿学校保健学会幹事会開催（於：京都教育大学）

[平成30年5月12日 近畿学校保健学会平成29年度会計監査（於：関西福祉科学大学）]

平成30年10月8日 第2回近畿学校保健学会幹事会開催（於：大阪教育大学）

平成31年1月27日 第3回近畿学校保健学会幹事会開催（於：大阪教育大学）

・常任幹事会

平成30年5月12日 近畿学校保健学会常任幹事会開催（於：関西福祉科学大学）

平成30年8月19日 近畿学校保健学会常任幹事会開催（於：大阪教育大学）

平成30年12月15日 近畿学校保健学会常任幹事会開催（於：大阪教育大学）

・選挙管理委員会

平成30年10月8日 第1回選挙管理委員会開催（於：大阪教育大学）

平成31年1月27日 第2回選挙管理委員会開催（於：関西福祉科学大学）

平成31年2月14日 第3回選挙管理委員会開催（於：関西福祉科学大学）

・年次学会、評議員会及び総会

平成30年6月30日 第65回近畿学校保

健学会年次学会開催

会長：小谷 裕実（京都教育大学）

平成30年度評議員会及び総会開催

（於：京都教育大学）

・学会奨励賞

平成30年6月30日

平成30年度近畿学校保健学会奨励賞

「いじめ場面における傍観者の利益構造の検討—個人の性格特性は集団における行動選択の決め手と成り得るか」

五十棲 計（滋賀大学大学院教育学研究科）

「教員養成系大学の保健体育専攻学生における性的マイノリティに関する意識調査」

三上 純（京都教育大学大学院）

・研修セミナー

平成30年12月15日

第7回研修セミナー開催

「学校不適応をおこす子どもたちの理解とその関わり方」

講師：竹端 佑介 先生（大阪国際大学人間健康学部人間健康科学科 准教授）

（於：大阪教育大学）

・学会通信

平成30年6月5日

近畿学校保健学会通信 No.150 発行

平成30年10月20日

近畿学校保健学会通信 No.151 発行

平成31年3月5日

近畿学校保健学会通信 No.152 発行

近畿学校保健学会会員数

平成31年3月31日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	1	12	27	40
京都府	3	11	22	36
大阪府	5	19	53	77
兵庫県	3	17	40	60
奈良県	2	6	12	20
和歌山県	1	10	27	38
計	15	75	181	271

名誉会員名簿（15名）

2019年7月6日現在

年	氏名	所属
平成14年	玉井 太郎	大阪
平成16年	大山 良徳	大阪
平成16年	美崎 教正	兵庫
平成22年	勝野 眞吾	兵庫
平成24年	小西 博喜	京都
平成24年	寺田 光世	京都
平成24年	八木 保	京都
平成26年	大矢 紀昭	滋賀
平成26年	堀内 康生	大阪
平成26年	三野 耕	大阪
平成27年	山本 公弘	奈良
平成28年	藤本 正三	大阪
平成29年	武田 眞太郎	和歌山
平成29年	横尾 能範	兵庫
平成29年	北村 陽英	奈良

3. 2019年度予算案

【収入】

	予算額	前年比	摘要
会計収入	690,000	0	会費@3,000円×230人
第5回研修セミナー	0	0	
雑収入	0	0	
前年度繰越金	895,205	157,644	
合計	1,585,205	157,644	

【支出】

	予算額	前年比	摘要
印刷費	80,000	20,000	学会通信（No.153～155）
郵送費	100,000	20,000	学会通信等発送 振込手数料等
事務費	50,000	0	学会通信送付簡代 文具代等
人件費	80,000	0	事務雇用費、会議交通費等
会議費	50,000	0	常任幹事会、幹事会（年3回）
第8回研修セミナー	50,000	0	会場費・手土産代
役員選挙積立金	33,000	0	
年次学会補助金	150,000	0	大阪府・第67回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	0	年間契約（「カイク」作成費含む）
予備費	892,205	117,644	
小計	1,585,205	157,644	
次年度繰越金	0	0	
合計	1,585,205	157,644	

2. 平成30年度決算報告及び会計監査報告

【収入】

	予算額	決算額	増減額	摘要
会計収入	690,000	683,000	3,000	会費@3,000円×231人
2016・2017年度選挙積立金	66,000	66,000	0	
雑収入	0	0	0	
前年度繰越金	737,561	737,561	0	
合計	1,493,561	1,496,561	3,000	

【支出】

	予算額	決算額	差額	摘要
印刷費	60,000	86,370	26,370	学会通信（No.150～152）、研究の進め方
郵送費	80,000	108,106	28,106	学会通信発送 振込手数料等
事務費	50,000	9,946	-40,054	学会通信送付簡代
人件費	80,000	73,000	-7,000	事務雇用費、会議交通費等
会議費	50,000	23,190	-26,810	常任幹事会、幹事会（年3回）
第7回研修セミナー	50,000	7,600	-42,400	手土産代等
役員選挙積立金	99,000	54,584	-44,416	H28・29年度選挙積立金含む
年次学会補助金	150,000	150,000	0	兵庫県・第66回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	88,560	-11,440	年間契約（「カイク」作成費含む）
予備費	774,561	0	-774,561	
小計	1,493,561	601,356	-892,205	
次年度繰越金	0	895,205	895,205	
合計	1,493,561	1,496,561	3,000	

上記の通り相違ありません。

令和元年5月5日

監事

宮井 信行

監事

平井 美幸

4. 名誉会員の承認

松本健治先生（鳥取大学名誉教授・近畿学校保健学会幹事）

5. 第67回近畿学校保健学会 開催地及び会長

次期学会開催地：大阪府

会長：楠本 久美子（四天王寺大学）

6. その他

新幹事長・常任幹事の承認

新幹事長：後和美朝（大阪国際大学）

常任幹事：大川尚子（京都女子大学）

西岡伸紀（兵庫教育大学）

宮井信行（和歌山県立医科大学）

2019 年度

第1回近畿学校保健学会幹事会議事録

日時：2019年6月1日（土曜日）

14:00～16:00

場所：大阪教育大学天王寺キャンパス

西館講義室 A

出席者：【幹事長】白石

【常任幹事】大川、笠次、鬼頭、後和

【幹事】（滋賀）大平、高野、谷川

（京都）井上、上田、藤原

（大阪）楠本、古角、松永、吉岡

（兵庫）森脇

（奈良）高田、辻井

（和歌山）内海、宮井、宮下、森岡

（計 22 名敬称略・順不同）

欠席者：旧常任幹事（8名）、新幹事（6名）

【監事】平井、宮井

オブザーバー：大平（年次学会長）

議 題：

1. 平成30年度会計報告および監査について

平成30年度会計報告について大川常任幹事より資料をもとに説明され、また平井、宮井両監事より会計処理が適切に行われていた旨の報告がなされ、承認された。

2. 2019年度予算案について

大川常任幹事より2019年度予算案について、特に今後の消費税の改正による印刷費および郵送費の値上りを考慮して前年比20,000円を増額し、その他は前年と同額であることが資料をもとに説明され、原案通り評議員会および総会に諮られることになった。なお、今後の年号表記については西暦とすることになった。

3. 平成30年度事業報告について

後和常任幹事より資料をもとに説明され、特に例年と異なり平成30年度は選挙管理委員会が設置されたことについて補足説明され、了承された。

4. 第66回近畿学校保健学会について

・年次学会について

大平年次学会長より学会通信 No.153 に掲載予定の資料をもとに、大会テーマは「チーム学校における学校保健の連携と協働」とし、一般演題（24 演題）、教育講演、シンポジウム等について説明がなされ、プログラムが了承された。

・評議員会および総会の運営について

年次学会当日の12時40分～13時30分に開催することとし、慣例に従い司会は前回の年次学会長の小谷裕実先生（京都教育大学）に依頼することで、了承された。

5. 名誉会員の推戴について

和歌山地区より松本健治先生（鳥取大学名誉教授）の推薦があり、代表幹事の森岡常任幹事より資料をもとに説明され、全会一致で松本健治先生を名誉会員として推戴することが決まり、評議員会および総会に諮られることになった。

6. 第67回近畿学校保健学会学会長について

次期学会開催地である大阪地区の後和代表幹事より、学会長として四天王寺大学楠本久美子先生が推薦され、了承された。また、年次学会長より資料をもとに説明され、開催日程を2020年6月27日、会場をあべのハルカス23階四天王寺大学サテライトキャンパスで開催することになった。

7. その他

特になかった。

報 告：

1. 学会通信 No.153 号の内容について

後和常任幹事より学会通信 No.153 号をもとに説明され、第 65 回年次学会のプログラムが中心になること、2019 年 6 月中旬発行することが報告された。

2. その他

特になかった。

特別審議：

1. 新幹事長の選出について

幹事の任期満了に伴う次期幹事長の選出について、白石幹事長より候補者の自薦および他薦の申し出がなされたが、候補者の推薦がなかったため、新幹事を被選挙人として幹事長選挙を行った結果、後和幹事が新幹事長として選出された。

幹事長就任のご挨拶

大阪国際大学

後和 美朝

この度、令和元年 7 月 6 日に開催されました第 66 回近畿学校保健学会総会におきまして、第 9 代目幹事長に就任致しました後和美朝でございます。どうぞよろしくお願い致します。

これまで、白石龍生前幹事長の下で、2 期 5 年間、常任幹事を務めさせて頂き、学会運営に携わってまいりました。私にとって学会運営に携わった経験が無く初めてのことでしたので、白石龍生前幹事長の退任のご挨拶にもございますように、会員の皆様からお預かりした浄財をいかに役立てるかを重点課題として強く認識し、学会運営を考えることから始めました。その中で、まずは学会通信の印刷費の削減から取り組むことにし、結果的に印刷費を大幅に削減することができました。これは学会通信の自主印刷を了承頂き、毎回の幹事会での原稿確認を快く行って頂いた幹事の先生方のお力添えがなければ成し得なかったことで、幹事の先生方には深く感謝を致します。また、学会通信等の郵送費削減と相成って、年度繰越金は 5 年間で 50 万円程度回復することができました。しかし、第 56 回年次学会（2009 年度）から実施されてきました年次学会補助金に対する減額についてはその解消までに至らず、白石龍生前幹事長におかれましては心残りを感じておられると思われます。

学会本来のあり方としては会員を対象にした学会通信や年次学会、宮下和久元幹事長時代から引き継がれてきました研修セミナーでの取り組みが重要であることは言うまでもありませんが、このような学会活動だけでなく社会的な役割も担った学会の在り方を再考すべき時期にきているのではないのでしょうか。そのため、学会からの発信源となっていますホームページについても内容だけでなくその活用方法も含めて検討する必要があると考えております。そして、このような学会の活性化の取り組みが、結果として会員数の増加につながるものと考えております。

これからも歴代幹事長の意志を継承しつつ、近畿学校保健学会のさらなる発展にむけて微力ではありますが、邁進する所存です。会員の皆様におかれましては、ご指導ご支援を賜りますようお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

幹事長退任のご挨拶

大阪教育大学名誉教授

白石 龍生

第61回近畿学校保健学会総会において幹事長に就任し、先日の第66回総会まで2期5年にわたり務めさせていただきました。大阪教育大学を定年退職する年に幹事長を辞する予定でしたが、2期目が3年間になるという役員任期改正があり、想定外でしたが、5年間勤めました。この間学会運営ならびに事業遂行に関しまして、会員の皆様から暖かいご支援を頂きました。紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。

役員の任期が2年から3年に延長されたかと申しますと、会員の皆様からお預かりした浄財を役員選挙（予算のうちかなりを占めます）に費やすわけにはいかない、会員数減少に歯止めがきかない（会計上の問題）という事情がありました。常任幹事の先生方は、学会通信の印刷費、発送費の削減に知恵を絞って下さいました。また幹事会を年3回開催してきましたが、幹事の先生方に一度も交通費をお支払いできませんでした。手弁当で学会運営にご協力いただきました幹事の先生方に、心よりお礼申し上げます。先生方の貴重な時間と労力を頂戴しながら何も報えなかったことが気がかりです。

5年前に本学会が「次世代を担う子ども達の健康を考え、今何をすべきかについて発信できる」場としてさらに発展するよう、微力ですが努力したいと申し上げたのですが、十分なことができず、申し訳なく思っています。常任幹事として広報担当の後和美朝先生（大阪国際大学）、総務担当の笠次良爾先生（奈良教育大学）、学会活動担当の鬼頭英明先生（兵庫教育大学）、財務担当の大川尚子先生（関西福祉科学大学）にご就任いただきました。（ ）内は5年前の所属で、後和先生と笠次先生だけが現在も5年前と同じ所属です。何とか幹事長としての職責を全うできたのは常任幹事の先生方のご尽力のたまもので、この場を借りてお礼申し上げます。

「近畿だからできること、近畿でしかできないこと」をやりたいと就任の挨拶で申し上げたのですが、十分なことができませんでした。私の念願であった学会誌（オンラインジャーナル）を発行するということには、着手できませんでした。単独で学会誌にしなくても、査読のある他学会での公表の後押しをするといったことができるかもしれません。また近畿学校保健学会でご指摘をいただいたことを踏まえて、日本学校保健学会で発表するという方法もあるかもしれません。学会の在り方も変わっていいように思います。

後和新幹事長のもとで本学会がさらに発展することを祈念して、退任の挨拶とします。

2019～2021 年度幹事及び評議員 (▲は幹事)

2019年7月6日現在

滋賀県		幹事定数 3	評議員定数 11		
板持 紘子	元 滋賀医科大学		住吉 由加		栗東市立栗東西中学校
大迫 芳孝	滋賀県薬剤師会		▲ 高野 知行		びわこ学園医療福祉センター野洲
▲ 大平 雅子	滋賀大学		田中 輝美		栗東市立葉山中学校
木村 誠	木村歯科医院		谷川 尚己		元 びわこ成蹊スポーツ大学
小西 眞	小西医院		▲ 藤居 正博		滋賀県歯科医師会
志村 美好	大津市立真野中学校				
京都府		幹事定数 3	評議員定数 10		
▲ 浅井 千恵子	関西女子短期大学		山下 正純		京都府歯科医師会
▲ 井上 文夫	京都女子大学		▲ 藤原 寛		京都府立医科大学
江寄 和子	園田女子大学		松井 道宣		京都府医師会
長村 吉朗	京都市学校医会		安岡 良介		京都府歯科医師会
林 鐘声	京都市学校医会				
大阪府		幹事定数 6	評議員定数 19		
池田 行宏	近畿大学		玉井 久実代		大阪国際大学短期大学部
▲ 大川 尚子	京都女子大学		早見 直美		大阪市立大学
鍵岡 正俊	関西女子短期大学		出水 典子		大阪府立夕陽丘高等学校
▲ 楠本 久美子	四天王寺大学		平井 美幸		大阪教育大学
甲田 勝康	関西医科大学		藤田 大輔		大阪教育大学
▲ 古角 好美	大和大学		藤田 裕規		近畿大学
▲ 後和 美朝	大阪国際大学		古川 恵美		関西福祉大学
▲ 白石 龍生	日本福祉大学		森口 久子		森口医院
高山 昌子	大阪国際大学		▲ 吉岡 隆之		奈良学園大学
竹端 佑介	大阪国際大学				
兵庫県		幹事定数 6	評議員定数 18		
赤澤 真旗子	明石市立大久保南小学校		▲ 中村 晴信		神戸大学
五十嵐 裕子	和歌山県立医科大学		▲ 西岡 伸紀		兵庫教育大学
大平 曜子	兵庫大学		長谷川 ちゆ子		元 湊川短期大学
小原 久未子	神戸大学		▲ 春木 敏		甲南女子大学
▲ 川畑 徹朗	元 神戸大学		間瀬 知紀		京都女子大学
北口 和美	元 大阪教育大学		宮脇 千恵美		平安女学院大学
▲ 鬼頭 英明	法政大学		▲ 森脇 裕美子		姫路獨協大学
小池 理平	姫路市教育委員会		山本 順子		兵庫県立高砂南高等学校
永井 純子	福山平成大学		山本 千津子		西宮市教育委員会

奈良県		幹事定数 3	評議員定数 4		
▲	笠次 良爾	奈良教育大学		高橋 裕子	京都大学
▲	高田 恵美子	畿央大学	▲	辻井 啓之	奈良教育大学
和歌山県		幹事定数 3	評議員定数 10		
	有田 幹雄	角谷リハビリテーション病院		松本 健治	和歌山県立医科大学
▲	内海 みよ子	和歌山県立医科大学	▲	宮井 信行	和歌山県立医科大学
	竹下 達也	和歌山県立医科大学		宮下 和久	和歌山県立医科大学
	永井 尚子	和歌山県立医科大学		宮本 邦彦	和歌山県立医科大学
	服部 園美	和歌山県立医科大学	▲	森岡 郁晴	和歌山県立医科大学

2019～2021 年度監事

玉井 久実代 大阪国際大学短期大学部

毛利 春美 関西女子短期大学

第 67 回近畿学校保健学会（2020 年度年次学会）案内

- ・ 学会長：楠本 久美子（四天王寺大学）
- ・ 大会テーマ：子どもの目に関する現代的健康課題
- ・ 日時：2020 年 6 月 20 日（土曜日）
- ・ 会場：四天王寺大学あべのハルカス 23 階四天王寺大学サテライトキャンパス
あべのハルカス 25 階 E・F 会議室
- ・ プログラム（案）
一般演題発表，教育講演，シンポジウム

編集後記

今期も引き続き常任幹事をさせていただくことになりました。4 月に大学を異動し、新たな気持ちで養護教諭の養成に取り組んでいるところです。学会運営も新しい体制で、「近畿だからできること、近畿でしかできないこと」について取り組んでいきたいと思います。

今年も猛暑が続き、熱中症患者の発生が多く報告されました。また、異常気象も多く見られ、この度の台風 15 号の影響による被害（大雨・暴風・停電）は甚大なものでした。テレビの報道で今回の台風の被害の様子を知り驚いています。心よりお見舞いを申し上げます。

季節の変わり目ですので、会員の皆様もくれぐれもご自愛ください。

（常任幹事 大川尚子）